

〔源氏物語湖月抄二〕源氏詞、足下也、此中將をさしての給ふ詞也、

〔枕草子五〕宰相のきみかき給へといふを、なをそこになどいふほどに、○下

〔伊呂波字類抄人倫〕其ソレ。 某。 ム 已上同

〔書言字考節用集人倫〕某ソレガ。不レ敢レ行レ其レ名者。皆レ曰レ某也。 某甲。出レ文選。又レ事苑。甲次。第橋。恣史。 何オニ某ガシ。

〔倭訓栞前編〕十三。それがし。 某をよめり、禮記の注に、某名也、臣諱君故曰某、凡不知名者皆曰某と

見えたり、某がぬしといふ義成べし、今俗自稱とするは、西土にも某啓す、某白すの類皆名に代る也、北山抄などに、ムをそれがしとよむは、篇海に義同某と見え、集韻にム通作私とも見えたり、

〔類聚名義抄イ〕彼和。委反。カレ。

〔伊呂波字類抄辭〕彼カレ。 他。 人。 夫。 已上同

〔書言字考節用集人倫〕渠カレラ。儂支那。俗謂他人。 彼等。

〔倭訓栞前編〕六。かれ。 彼は此に對す、日本紀に他もよみ、詩經に伊もよめり、又夫をよめり、人或は

國を指せり、他人を渠といひ、我を儂といひ、彼を那といひ、此を這といふは、俱に俗語也、他も俗語、
晉書に見ゆ、他家も同じ伊も晉書に伊等とも見ゆ、渠はもと詎に作る、列子に見えたり、

〔日本書紀神代〕一書曰、○中弟○火愁吟在海濱時遇鹽筒老翁、○中老翁曰、勿復憂吾將計之、計曰、海

神所乘駿馬者八尋鰐也、是豎其鰭背而在橋之小戸、吾當與彼者共策、

〔宇治拾遺物語十四〕あるじさてあるべきならねばや、廳にはまたなにものか候といへば、それ

がし、か。 かがしといふ、○下。 誰何タレ。 何誰タレ。 誰誰字。

〔伊呂波字類抄人倫〕誰タレ。 詎。 孰。 述。 類已上同。

〔書言字考節用集人倫〕疇タレ。 誰也。 誰也。 孰也。